新着図書から

♣図書館に新しく入れた本

『社会的ジレンマ～「環境破壊」から「いじめ」まで～』
山岸俊男著（ＰＨＰ新書）

自分の都合や利益を優先して行動すると、結果的に望ましくない状態が生まれてしまう、それが社会的ジレンマです。皆が望むことがなぜ達成できないのかーこの疑問へのひとつの答えを易しく説く好書です。交通事故ワースト県脱出のヒントがここにあるかも。

建設環境工学科教官　及川　康

『ホビット（ゆきてかえりし物語）』
Ｊ・Ｒ・Ｒ・トールキン著（原書房）

この本は、映画にもなっている「指輪物語」の前編ともいうべきものです。指輪物語を映画で見た人も、本で読んだ人も、知らなかった人も、ぜひ一度ホビットを読んでトールキンの世界を味わってみて下さい。きっと好きになります。

２年Ｍ組　島村　豪敏

『アメリカ、自由の名のもとに』
ナット・ヘントフ著（岩波書店）

最近、特に9.11以後のアメリカを見ていると、この「自由と民主主義の国」に深刻な不信を感じることが多い。けれどもこの本は、アメリカの芯にある良心が揺るがずに健在であることをしっかりと示している。著者は音楽関係のライターとしてもアメリカ最高の一人で、その文章が入っているのもうれしい。

一般教育科教官　高橋　宏明

『海辺の家』
マーク・アンドラス著（竹書房文庫）

自分があと余命４ヶ月だと知ったら、皆さんなら何をしますか？妻とはうまくいかずに離婚、建築デザイナーの仕事も失い、挙げ句余命４ヶ月と宣告されたジョージ。自分の余命を知ったジョージは、今ではすっかり心通わなくなってしまった息子サムと対立しながらも、長年の夢だった「海辺の家」を建て始めます。自分の人生を見つめ、そしてサムと和解するために――。

『“家を建て直す”…それは即ち“人生を建て直すこと”』

２年Ｓ組　宮脇　沙希子

『星々の舟』
村山由佳著（文藝春秋）

戦前生まれの父、その後妻の母、異母兄弟達とその孫という性別、世代、価値観がそれぞれ異なりながらも家族という舟の上で一緒に苦悩しながら生きる人達を衝撃的に綴った今年の直木賞受賞作品である。おいしいコーヒーの入れ方の恋愛小説シリーズでも知られる著者の重厚な作品である。

電気情報工学科教官　荻原　昭文

『閑（かん）のある生き方』
中野孝次著（新潮社）

現代人は大抵の人は多忙を強いられている。多忙の中にあっては良く生きるということは難しい。人は「閑」の中でのみ真に自分の人生を生きることができる、と著書は言う。「閑」のある生き方がいかに楽しく、豊かであるかを説く。秋の夜長を静かに、味わいつつ読んでみたい本である。

機械工学科教官　堀口　正一

『FINE DAYS』
本多孝好著（祥伝社）

人にはそれぞれ違った生活があり、その生活は他の誰のものでもなく「自分」の「もの」です。この小説には短編で４つの生活が書かれてありますが、それらの生活を読んでみてどう感じるかは読んでみた人しだいだと思います。共感を得ることもあると思うのでぜひ一度目を通してみて下さい。

３年Ｃ組　辻井　雄

『雪の中の三人男』
エーリヒ・ケストナー著（創元推理文庫）

ケストナーは少年少女向けの作品で有名な作家だが、これは大人のための心温まる小説。品のよいユーモアに包まれていて、読後しみじみと幸福な気分になれる。私の愛読書の一つで、特にクリスマス時期にオススメ。

一般教育科教官　高橋　宏明

『間違いだらけの学習論～なぜ勉強が身につかないか～』
西村克彦著（新曜社）

試験が終われば一件落着、覚えた公式も喉元過ぎればきれいさっぱり？「詰め込み教育の問題点は実は詰め込めていないこと」「教科書は厚いほうがいい」といった、一見奇異にも聞こえかねない学習論について、実に丁寧に論理を追って納得へと導いてくれる本です。

建設環境工学科教官　及川　康

『聖まるこ伝』
さくらももこ著（集英社）

人生に疲れている人にお勧めのお気楽な一冊。まるこをとりまく世界の名（迷）言集である。

「先のことを悲嘆するより、今この酒がうまけりゃいいんだ」こう言ってのける父ヒロシの生き方にあこがれを憶えるのである。そんな父ヒロシのモットーは

「毎日たのしい」…

機械工学科教官　吉永　慎一